

「主は宿られる」

長老 岡田由子

新約聖書 ヨハネによる福音書 1章 14～18節

本日、私共に与えられた聖書の箇所は、ヨハネによる福音書 1章の 14～18節です。この箇所はヨハネによる福音書の冒頭の部分で大変大切なところです。

ご存知のように新約聖書には 4つの福音書があります。マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの福音書です。福音とは、「良い知らせ」又は「良いおとずれ」という意味ですから、福音書には神様からの良い知らせである、イエスキリストのことが書かれています。

十字架に架かれ、3日後に復活されたイエス様。そのイエス様とその後 40日間過ごした使徒たちは、イエス様が天に上がられた後、聖霊をさずけられ目覚ましい宣教の業に励んでいきました。しかし、迫害によって殺害されたりして亡くなっていき、イエス様のことを語りつなげる人がだんだんと少なくなっていきました。弟子たちはこの出来事を後世に伝えていくために、書き記して残していく必要ができ、こうして福音書は書かれていきました。ですから 4つの福音書はすべて主イエスキリストのことが書かれています。この 4つを比べてみますと、書き出しに各々特徴があり、とても印象深いものがあります。

マタイによる福音書は、イエスキリストの系図から始まり、アブラハムからイエスキリストに至るまでの 42代の名前を連記するところから始まり、主イエスがアブラハムの子孫でありダビデの子孫であることを明確にするところから始まっています。

マルコによる福音書は、「神の子イエスキリストの福音の初め」として、洗礼者ヨハネの記述から始まり、主イエスが洗礼者ヨハネから洗礼を受けられ宣教を始められるところから始まっています。

また、ルカによる福音書は献呈の言葉があり、イエス様について見聞きしたことを順序よく書いて献呈するとの形で、よくクリスマスに読まれています。イエス様の誕生の様子が物語のように記されています。

そしてヨハネによる福音書は、「初めに言<sup>ことば</sup>があった」と、聖書の一番初めの創世記 1章 1節の文章に似た記述を取り、神が万物を創造される以前から「言<sup>ことば</sup>」として神は在り、すべての物は「言<sup>ことば</sup>」によって成ったとの宣言から始まっています。

マタイ、マルコ、ルカが客観的に物語るようにイエス様を伝えているのに対し、ヨハネによる福音書は、主観的かつ抽象的な表現でイエス様を伝えているように思います。それだけに、心惹かれる言葉がたくさんあるように思います。

今回、与えられている箇所もとても印象深く、特にこの 14節は、この 1節だけで主イエスのすべてを表しているといえる言葉だと思います。「言<sup>ことば</sup>は肉となって、わたしたちの間に宿られた。わたしたちはその栄光を見た。それは父の独り子としての栄光であって、恵みと真理とに満ちていた。」

「言<sup>ことば</sup>は肉となって私たちの間に宿った」

神はキリストとなって私たちのところに来てくださった。特にこの「宿った」「私たちの間に宿った」という言葉が深く心に刻まれました。

「宿る」とは、原語では「幕屋を張る」という意味だそうです。荒れ野を彷徨ったイスラエルの人々は、天幕を張ってそこに神様がいてくださることに力を与えられ、勇気づけられて旅をすることができた。そういうことに由来するなら、私たちもこの地上の生活のうえで苦しいこと、途方に暮れる思いの中に「主が宿ってくださる」、主がいてくださることで慰めを与えられ、勇気をいただいて生活することができます。

また、日本語で「宿る」というと、住むとか唯いるという意味よりもっと深く定着するとか、又は「母親の胎内に子供を宿す」というような言い方をします。唯共にいてくださるというだけでなく、肉体の一部に深く留まってくださるというような思いを与えられます。

「言<sup>ことば</sup>は肉となって私たちの間に宿った」

私たちにはこのような大きな恵みを与えられていることを改めて教えられ、感謝の思いを強くしました。

コリントの信徒への手紙一の6章19節に「あなたがたの体は、神からいただいた聖霊が宿ってくださる神殿であり」という言葉があります。私共の体が神殿であるとは何と畏れ多いことかと思いました。自分自身を振り返ってみても、神殿にはふさわしくない欠けだらけの罪深き身であることを思い、恥じ入ります。しかし、神はこのような欠け多く罪深き私共を愛して下さり、御子を宿して下さった。

ヨハネによる福音書3章16～18節に「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。」とあります。イエスキリストをこの世にお遣わしになったのは、神の一方的な愛によるものだと、ヨハネは力強く宣言します。私共の信仰や行いなどとは関わりなく、神の愛がそうして下さったのです。

14節の後半、「わたしたちはその栄光を見た。それは父の独り子としての栄光であって、恵みと真理とに満ちていた。」

私たちは、神の独り子としてイエスキリストを知っています。独り子という意味は、単に唯一人の子という以上に、父なる神と本質的に同等であるということを表しています。ですから私たちは、イエスキリストを知ることで神を知ることができるのです。そしてその独り子は、「恵み」と「真理」に満ちているのです。

14節から18節までを読みますと、14節に「恵みと真理」、16節に「恵みの上に、更に恵みを受けた」、17節に「恵みと真理はイエス・キリストを通して現れたからである」と、合計4回「恵み」という言葉が記されています。ところが、ヨハネによる福音書全体の中で「恵み」という言葉はこの部分の4回しか使われていないのです。この前後、「恵み」という言葉は全く見るできません。

その理由は何なのでしょう。それはヨハネの深い思想と目的を表しています。つまり、イエスキリストは恵みに満ちていることを冒頭部分で説明した後、あえてヨハネは「恵み」という言葉に触れずにいるのです。その理由は、ヨハネによる福音書を読む読者が、自ら恵を捜し求めるようにと招いているからです。ヨハネによる福音書は抽象的に書かれている部分が多く、わかりにくい面もありますが、この福音書ほど主イエスの恵みを感じさせる書物もありません。「カナの婚礼」「サマリアの女との会話」「ベトザタとシロアムの池での癒し」「石打ちにされそうになった女性」「弟子たちの足を洗う主イエス」等々、恵みに恵みが満ちあふれています。その恵みは言葉で教えられるものではなく、読み手が福音書の中から探し出しなさいと招いているのです。これ

は神の招きです。恵みはイエスキリストの中にこそあることを覚えることが求められているのです。キリストの恵みとはキリストの愛とも言えるでしょう。私共に与えられる究極の恵みは、イエスキリストによる救いです。神様がその独り子を世に下し、その十字架と復活において私たちの救いの道を示してくださった、このことほど大きな「恵み」はありません。

また、「真理」とは何でしょう。辞書を引くと「正しいこと」「偽りでないこと」「変わることのない正しい道理」などと書かれています。どんな時にも変わることのない真実なこと、と理解します。この世には何と真実でないことが多くあることでしょう。これこそ真実なこと、正しいことと疑わなかったことが、いとも簡単に覆される経験をされた方も少なくはないと思います。科学が発達し、今までわからなかった多くのことが解明され、ある意味真理に到達したかに思われますが、何が正しいことか、何が真理であるか、益々わからなくなっているのではないのでしょうか。しかし、イエスキリストこそ真実であり、ここにこそ真理があると、ヨハネは語ります。真理はイエスキリストによって現れているのです。

18節で「いまだかつて、神を見た者はいない」とあります。旧約の時代には、見える形で神を啓示されることはありませんでしたが、今、見える形で神は啓示されたのです。イエスキリストこそが見える形で来られた神であるとはっきりと言っています。

私共には、このイエスキリストが宿っておられる。罪深き身が主イエスキリストによって罪の縄目から解き放たれ、主イエスに教えられ導かれて、本来人間があるべき姿、「神に似た者」へと造りかえられることができるとの希望があるのです。

私共は自分の現実を見ると絶望することばかりです。そうでない方ももちろんおられるでしょうが、少なくも私はそうです。自己中心で愛の乏しい者です。少し褒められると凶に乗って、小さな失敗でくじけて悩んでしまいます。傲慢、怠惰、ねたみ、そしり、悪口と常に罪といわれるものの種をしっかりと自分も持っていることを知っています。「いいえ、私はもうそのような罪からはすっかり解放されています」と言える方はすばらしいと思います。しかし尚も絡みつく罪の縄目に絶望するのが現実です。

しかし、私共には希望が与えられている。イエスキリストが私共の間に宿ってくださる。恵みと真理に満ちたこの方が今も聖霊として来てくださっているということを現実の日々の生活の中で覚えたいと思います。そしてその希望が私共の生活を豊かにし、確かなものとされ、御心になつた歩みとしてくださることを信じて歩んでいく者とされましょう。

祈ります。

父なる神様 あなたの大きな愛によって、私共、あなたと信じる者の間に主イエスキリストの霊が宿ってくださっていることを心から感謝いたします。私共は小さく弱い者であります。あなたが常に共に歩んでくださいますから、強く大きくなることができます。感謝です。

あなたからいただく愛の応答として、私共もあなたの愛を、あなたの恵みを、あなたを知らない人に伝えていく勇気をお与えください。御言葉を語る勇気をお与えくださって感謝いたします。

この世のすべての人々に主の恵みが届きますように。

休暇中のご旅行中の秋本牧師夫妻をお守りください。

主イエス・キリストの御名により祈り願います。アーメン